

# 吉備池廃寺

## 第5次調査 現地説明会資料

2001.3.20

奈良国立文化財研究所・桜井市教育委員会

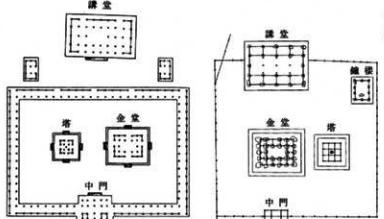
### 1. はじめに

吉備池廃寺は、1997年からはじめた発掘調査によって発見された飛鳥時代の寺院跡です。この寺院跡が日本で最初に天皇が発願（舒明11年＝639年）した「百濟大寺」の有力な候補であることをご存じの方も多いと思います。

池の南東にある土壇を発掘した第1次調査では、掘立柱地盤をほどこした巨大な基壇を発見し、寺院の中心堂宇である金堂の跡と推定されました。また、この西方にある土壇の調査（第2次）では、中央部に心礎を抜き取ったとみられる大きな穴や、心礎の据付痕などを確認し、この土壇が塔跡であることを明らかにしました。このような、金堂を東に、塔を西にならべる堂塔配置は法隆寺西院にみられる「法隆寺式伽藍配置」と呼んでいます。この場合、金堂と塔を取り囲むように回廊がめぐり、金堂と塔の中央部南に中門が建ちます。この中門と回廊の発見をめざした第3次調査では、想定位置に中門がなく回廊のがびていることが明らかになりました。また、この調査では、塔の西側にも回廊がまわることを確認しています。さらに講堂および東面回廊などの発見を目指とした第4次調査では、ほぼ想定位置に東面回廊の雨落構を検出して、回廊の東西幅はほぼ確定できたものの、金堂と塔の中央部北方に講堂は発見することができませんでした。

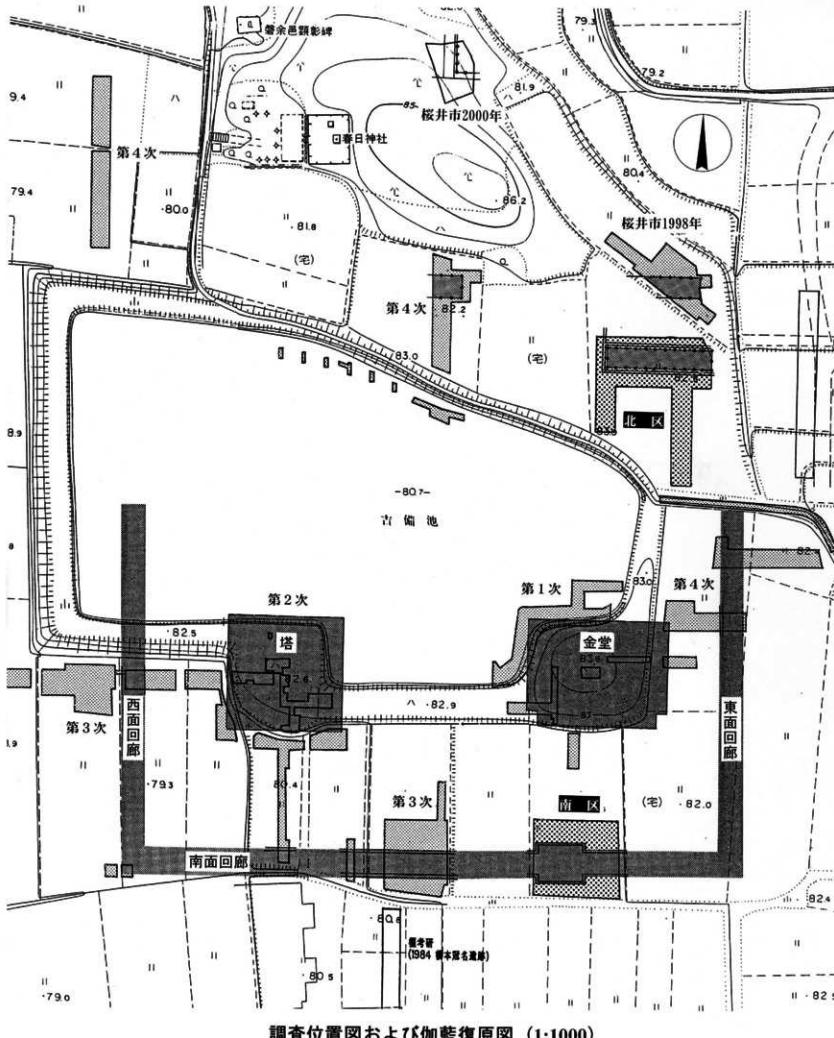
これらとは別に、金堂跡の北方で桜井市教育委員会が実施した調査（1998年度）では、巨大な柱頭形をもつ掘立柱建物の一部を発見しており、僧侶が日常生活をおく僧房の可能性が高いと考えています。

このような調査成果から、当初、法隆寺式と考えられた吉備池廃寺の伽藍配置は、大きく修正を迫られることとなり、杉崎廃寺（7世紀末創建；岐阜県古川町）のように、中門や講堂は金堂の南北軸線上に建つのではないかと推定されるようになってきました。このため本年度は中門および講堂、北面回廊の検出を目的として、金堂の南側と北側に調査区を設定しました。ここでは便宜的にこれらを「南区」、「北区」と呼んでおきます。調査は1月9日から開始し、現在も継続中です。調査面積は、南区が約530m<sup>2</sup>、北区が約600m<sup>2</sup>です。



法隆寺西院の伽藍配置図

杉崎廃寺の伽藍配置図



## 2. 発掘調査の成果

### (1) 南区

第3次調査区の東方で、金堂の南側にあたります。検出したおもな遺構は、中門、南面回廊、東西溝、掘立柱塀などです。遺構のほとんどは、巨大な流路（古墳時代？）によると思われる砂礫層で検出しました。

**中門** 調査区の南西隅付近で、南北方向の石組溝を発見しました。この石組溝は2mほどで途切れますが、南端でこれにつながるように東西方向の溝があり、さらにこの溝を東に追いかけると、北に折れたあとクラシク状に東にのびて、方形に張り出します。この北側にもほぼ対称に溝で区画された張り出しがあります。これこそ中門の遺構であり、第3次調査の成果などから、南北方向の石組溝は中門基壇南西の雨落溝、そのほかの溝は中門基壇の雨落溝を抜き取った痕跡と考えられます。しかし、この雨落溝の抜き取り痕跡で囲まれたなかには、中門の礎石据付穴や抜取穴などの痕跡は、発見することができませんでした。おそらく後世に削平されたものと思われます。

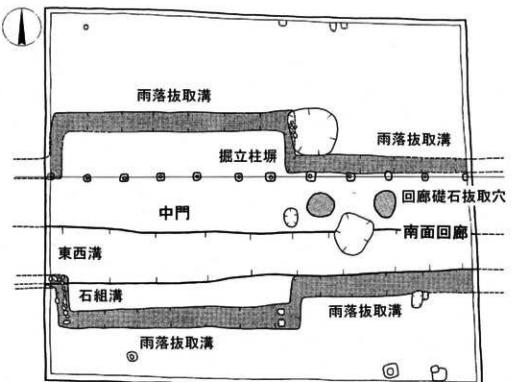
以上から、中門の基壇規模は東西12.0m×南北9.8mほどと推定され、正面3間×側面2間で正面中央の柱間に扉が開く中門を復原できます。柱間寸法は不明ですが、一案として桁行中央間3.6m、桁行両脇間2.7m、梁行3.4m、軒の出1.8mに復原することができます。

**南面回廊** 調査区の南西隅付近で東西方向の石組溝を発見しました。これは第3次調査で検出した南面回廊の南雨落溝の東延長線上にあたります。中門の東にも、回廊の雨落溝を抜き取った溝が続きます。また中門の東では、直径1.2～1.5mほど穴が東西に2つならびます。これは回廊北側柱筋の礎石を抜いた穴と考えられ、穴どうしの間隔は3mほどになります。回廊の基壇幅は明確ではありませんが、第3次調査で判明している5.6mとみてよいと思われます。

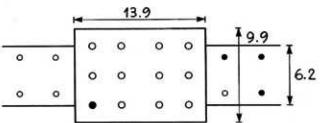
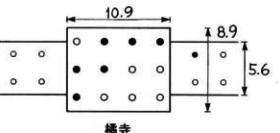
**東西溝** 調査区中央部やや南よりを東西に横断する素掘溝があります。この溝は回廊南雨落溝に接し、幅2～3m、深さ50cm以上となります。同様の溝は第3次調査でも検出しており、それに続くものでしょう。出土遺物から藤原京の時代の遺構と考えられます。

**掘立柱塀** 調査区中央部（東西溝の北側）を東西に横断する掘立柱穴列があります。掘形は約50cmの方形で、抜取穴には黄色い粘土が入ることが特徴です。第3次調査区でも同様の位置にこの柱列を検出しており、回廊建設時における足場と考えましたが、本調査区では中門上を直線的に横断することから、藤原京の時代（7世紀末～8世紀初）の塀である可能性が高まりました。

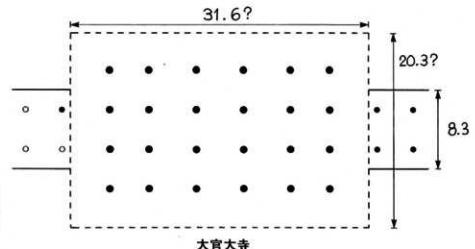
7世紀の寺院における  
中門・回廊の比較  
(単位:m)



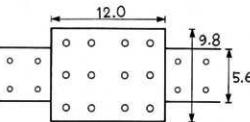
南区調査遺構図 (1:200)



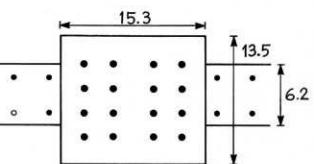
川原寺



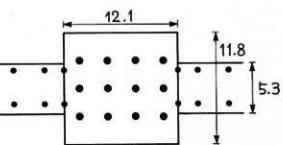
大宮寺



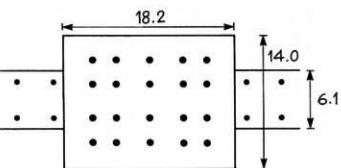
吉備津廃寺



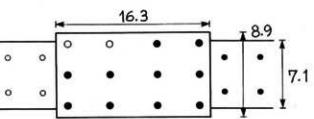
飛鳥寺



四天王寺



法隆寺



本薬師寺

## (2) 北区

第4次調査区の東方で、桜井市による調査区（1998年度）の南方に位置し、金堂の北方にあたります。検出したおもな遺構は、大型掘立柱建物1棟とそれとともに南北溝のほか、掘立柱建物数棟、東西溝などです。遺構の大部分は花崗岩が風化した地山面で検出しました。当初、5m×40mの南北に細長い調査区を設定しましたが、その北端部で大型掘立柱建物を発見したため、調査区を東西に大きく拡張しました。

**大型掘立柱建物** 調査区北方にある桁行11間×梁行2間の掘立柱建物。東妻は調査区の東壁際にあり、西妻は調査区の西端付近で検出しました。2.0×1.5mほどの巨大な柱直径をもち、柱のほとんどは抜き取られています。全体の長さは東西28.0m×南北5.4mほどで、柱間寸法は桁行方向が約2.5m、梁行方向が約2.7mとなります。また、柱痕跡が残る柱穴から、柱径は25~30cmほどと考えられます。

この東西に長い建物の外側（北側柱の北および南側柱の南）には、東西溝があります。この東西溝は、建物の西端近くで直角に折れて南北溝となり、調査区の北方に延びてゆきます。建物の外側を囲うように巡ることから、この建物の雨落溝と考えてよいでしょう。建物の推定柱位置からの距離は約1.2mとなり、これがこの建物の軸の出と考えられます。その他の遺構 大型掘立柱建物と重なる位置には、藤原京の時代と考えられる桁行4間×梁行1間の掘立柱建物があります。このほか、調査区北東部にも、2間×2間の掘立柱建物があり、さらに南に張り出した調査区の中ほどには、幅1.0m、深さ50cmの素掘りの東西溝があります。この東西溝からは、8世紀中頃の土器が出土しました。

## 百済大寺・高市大寺の略沿革

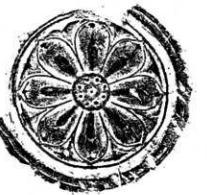
639（舒明11年）	大富と大寺をつくる。百済川のほとりを宮地とし、西の民は宮を造り、東の氏は寺を作る。書道県をその大匠とする。 百済川のほとりに九重塔を建てる。	日本書紀
642（皇統元年）	百済大寺を建てるために、近江と越の人夫を動員。	大安寺伽藍縁起 并記聖財帳 (以下、縁起) 日本書紀
673（天武2年）	美濃王と紀臣阿多麻呂を遣高市大寺司に任命する。	日本書紀
	百済の地から高市の地に寺を移す。	縁 起
677（天武6年）	高市大寺(たけちのおおでら)を改めて、大曾大寺(だいざんだいじ)と号す。	縁 起
694（持統8年）	持統、藤原宮(ふじわらのみや)へ移る。	日本書紀
702（大宝2年）	高橋朝臣笠間を遣大安寺司に任命する。	統日本紀
この頃（文 武 朝）	文武、九重塔と金堂を建て、丈六の仏像をつくる。	縁 起
710（和銅3年）	元明、平城宮(ならのみや)へ移る。	統日本紀
716（景亀2年）	(大安寺を)平城京へ移し建てる。	統日本紀

## 3. 出土遺物

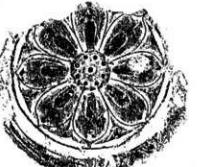
土器はおもに北区から7世紀半ば～中世のものが少量ずつ出土しています。7世紀半ばのものは百済大寺創建のものとみてよく、水瓶風の細頸壺など、寺院関連とみられる土器が目立ちます。

瓦は北区から多く出土しています。瓦の全重量は現在のところ260kgおよび、完形に近い瓦が数点出土するなど、これまでの調査ではみられなかった様相をもっています。大型掘立柱建物付近からの出土が目立ちますが、この建物は瓦葺きと考えられませんから、周囲に瓦葺き建物があつたことを推測させます。

そのほかに坩埚や硯が出土しています。

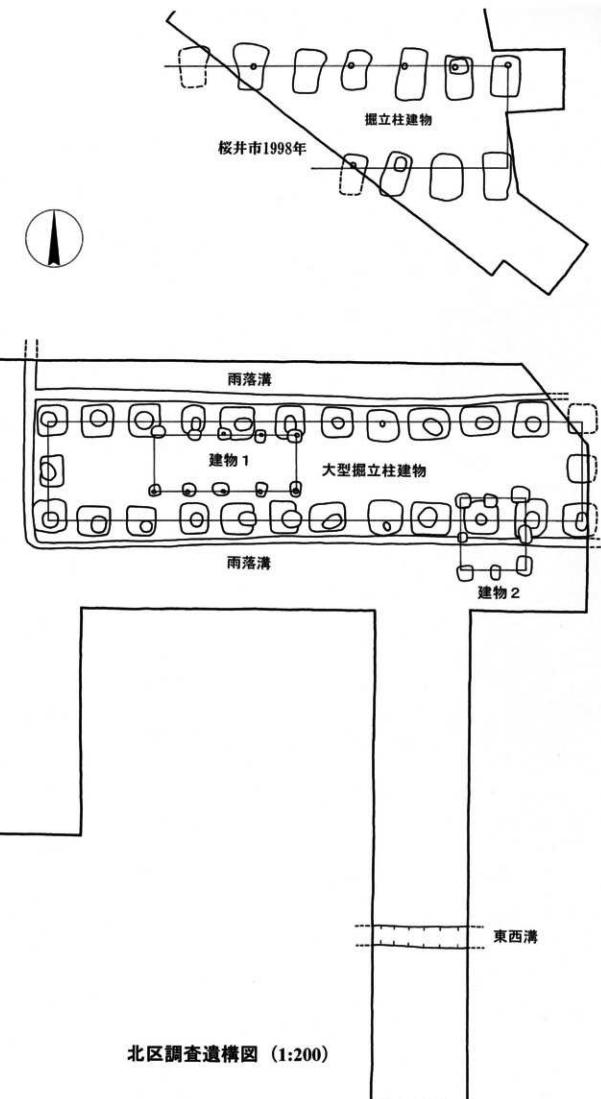


I A  
(本調査区出土)



I B  
(木之本庵寺出土)

## 吉備池庵寺の軒瓦



北区調査遺構図 (1:200)

## 4. 成果と課題

### (1) 中門を発見

昨年度までの調査によって、金堂や塔は同時代の他の寺院とは隔絶した規模をもつことが判明しています。ところが、今回の調査で発見した中門は、東西 12.0 m × 南北 9.8 m ほどと推定される基壇の規模から考えて、桁行 3 間 × 梁行 2 間という予想外に小規模なものでした。つまり、金堂や塔が巨大なのに対して、中門はやや見劣りするわけです。さらに 7 世紀の中門は、現存する法隆寺中門（4 間 × 3 間）をはじめ、飛鳥寺中門（3 間 × 3 間）、大官大寺中門（5 間 × 3 間）など、梁行を 3 間にとるものが知られています。それらと比較しても小規模なのです。

いっぽう回廊については、基壇幅が約 5.6 m と推定できることから、梁行は約 3.0 m ほどと考えられます。これも他の寺院の回廊と比べて小規模です。

しかし、中門と回廊の組み合わせだけをみれば、非常にバランスのとれた規模だということがわかります。どうして中門と回廊が小さいのか？ 金堂や塔とのアンバランスさは否めないところですが、これは今後に残された解明すべき課題のひとつです。

### (2) 大型掘立柱建物の性質

はじめに述べたように、北区で発見した大型掘立柱建物とよく似た建物は、桜井市による 1999 年度の調査でもみつかっています。桜井市の調査で発見された建物は、桁行 6 間以上 × 梁行 1 間で、柱間寸法は桁行が 2.72 m、梁行が 5.45 m です。今回発見した建物とは側柱間で約 13.5 m、建物心間で約 18.9 m 離れています。この 2 棟の建物は、柱穴位置や柱間寸法に若干の違いがあるものの、巨大な柱穴をもつことや出土遺物の年代観から、同時期に建っていたと考えてよいと思います。

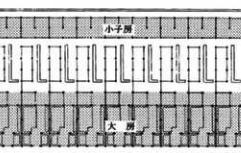
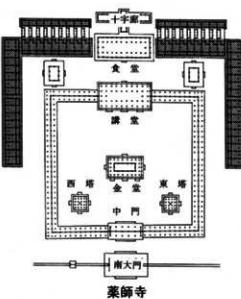
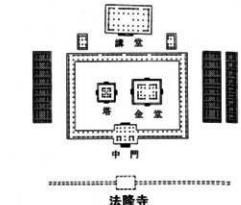
このような細長い建物は、桜井市の調査所見のように、僧侶が日常生活をおくる僧房とみて間違いないでしょう。現存する最古の僧房は、法隆寺西院伽藍の東にある東室という建物で（747 年以前に建立）。発掘調査で確認されている最古の僧房造構は、川原寺（665 年ころ創建）の西僧房です。今回発見した僧房造構は、百済大寺（639 年創建、673 年移建）の僧房と考えられますから、これまで発見されているなかでは、最古の僧房造構となります。

8 世紀の大きな寺院の場合、僧房は講堂を取り囲むように東・西・北の 3 方に配して、三面僧房を構成します。また梁行の大きい僧房（大房）と梁行の小さい僧房（小房＝小子房）を並立させて、一体として使うのがふつうです。ただし、このような特徴はいつまで遡るかわかつていません。桜井市の調査と今回の調査で発見した 2 棟の僧房は、南北に 2 棟並立しており、密接な関係をもつものと考えられますが、梁行規模はほとんど同じでありながら、桁行方向の柱間寸法に若干の相違点がみられるなど、8 世紀の僧房の特徴と異なる点があります。今回判明した 2 棟の僧房の特徴が、7 世紀半頃まで遡る一般的なものなのか、百済大寺独自のものなのか、類例に乏しく判断できませんが、僧房の建物形式やその発展過程を究明するうえで、貴重な発見といえるでしょう。

ところで金堂の南北中軸線は北区の発掘区西端付近を通ります。ですから、今回発見した僧房は金堂中軸線から分離されている、つまり東西に並立している可能性があります。このように多数の僧房が想定でき、ここで生活した僧侶の数の多さをしのばせます。このほか中門・回廊が造られていることからみても、吉備池廃寺の完成度は高く、名実ともに寺院として機能していたと考えてよいでしょう。

## 文献にみえる僧房

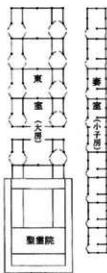
	大 房 高 長 広 高	中 房 高 長 広 高	小 房 高 長 広 高	出 典
興福寺	2 口 11 間 19 間	45 尺 16.6 尺 45 尺 16.6 尺	2 口 15 尺 12 尺 1 口 19 間 15 尺 12 尺	興福寺流記
大安寺	2 口 374.5 尺 2 口 245 尺 2 口 125 尺	39 尺 10.5 尺 39 尺 10.5 尺 39 尺 10.5 尺	2 口 274.5 尺 2 口 291 尺 1 口 270 尺	大安寺伽藍縦起井 流記資料帳
元興寺	2 口 12 房 2 口 10 房	43 尺 43 尺		
東大寺		52 尺	35 尺	【奈良時代僧房の研究】
法隆寺	175 尺 181 尺 155 尺 106 尺	38 尺 11 尺 38 尺 不明 32 尺 不明 38 尺 不明		法隆寺伽藍縦起井 流記資料帳



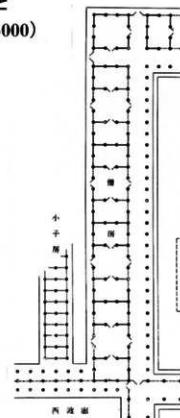
薬師寺西僧房



僧房の類例（1:800）と  
伽藍配置上の位置（1:3000）  
(アミかけ部分が僧房)



法隆寺東室・妻室



川原寺西僧房

### (3) 吉備池廃寺の伽藍配置

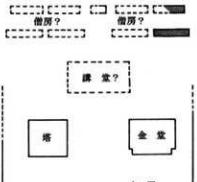
今回の調査によって、中門は金堂の中心を通る南北の軸線（中軸線）上になく、西へずれていることが明らかになりました。金堂中軸線から中門中軸線までの東西間距離は約 9.9 m です。また、東面回廊の南北推定心から中門中軸線までの距離は約 44.1 m になります。金堂と中門の西辺を合わせているわけでもなく、塔との関係からその位置が決まったわけでもなさそうです。したがって、現在のところ、どうして中門は金堂の中軸線上にないのか、その位置をどのようにして決定したのかはナゾとしておかなければなりません。

一方、北区で今回発見した僧房はある規則性があるようです。すなわち、金堂と塔の建物心々間距離は約 85 m ですが、これは金堂心から僧房の北側柱までの距離とほぼ等しいのです。また先ほども述べたように、僧房は金堂中軸線をはさんで東西に並立している可能性があります。ただし、先ほどの金堂と塔の距離（85 m）は、飛鳥時代の測地基準である高麗尺（= 大尺；1 大尺 ≈ 0.356 m）に換算しても、キリのいい数値にはなりません。これらの点を含めて、吉備池廃寺の伽藍配置計画の解明が今後の課題として浮上してきました。

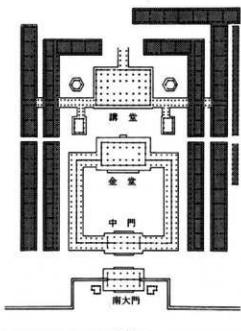
もうひとつ、伽藍配置のなかで重要な問題があります。北区で発見されると予想していた講堂がみつからなかったことです。金堂と塔の中心部北方を発掘した第 4 次調査でも、講堂は発見されていません。そもそも講堂は建てられていたのでしょうか。文献によれば 651 年につくられた繪仏は、百済大寺の後身である奈良時代の大安寺に伝存しています。薬師寺では、繪仏は講堂に安置されています。伽藍の完成度も高いわけですから、講堂も存在したはずですが、これまでの調査ではその位置を特定できませんでした。8 世紀の大寺院の伽藍配置をみると、僧房は講堂の近くに配置されています。今回の調査区では瓦が多量に出土することから、瓦葺きの建物がこの付近にあったことが想像され、講堂（もしくは食堂）が近くに建っていた可能性もあると考えています。なお、講堂の所在に関連して、北面回廊の所在も今回の調査ではわかりませんでした。

伽藍全体の広がりという点からみると、今回の調査によって少なくとも金堂北側には、複数棟の僧房の存在が確認でき、これらを伽藍中軸線から西に折り返せば、塔の北方にも僧房が建ち並ぶ姿を想定できるかもしれません。また、2000 年度におこなった桜井市の調査では、伽藍北方にある丘陵から、吉備池廃寺と関連をもつ遺構を検出しています。これらによって、吉備池廃寺はかなり広大な寺域を有していたと考えられるのです。

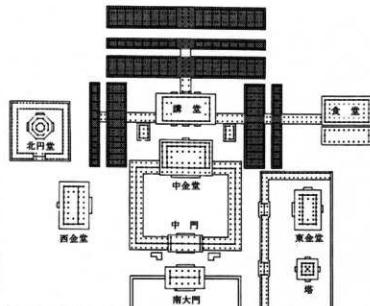
今回の調査では、講堂や北面回廊はみつかれませんでしたが、中門と僧房を発見したことは大きな成果です。それによって、吉備池廃寺の伽藍配置の一端が明らかになっただけでなく、7 世紀の寺院史および建築史に新たな資料を提供したと言えるでしょう。特に僧房が多数建ち並んでいたことが推定できるようになったことは、巨大な金堂、塔と合わせて、日本最初の天皇による勅願寺としての威容が、ますます浮かび上がってきたと言えます。



吉備池廃寺伽藍復原図



大安寺



興福寺

8世紀における  
大寺院の伽藍配置と僧房  
(1:3000 アミかけ部分が僧房)



元興寺